
08-40XX

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

08 - 40XX

【Nコード】

N6804R

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

水没の危機にある惑星地球、海上都市『シーズエデン』、南極海底都市より発見された蒼い石『ムーンダスト』、進化系新人類『シヤグライナ』、戦闘型人造体『カレイド』——『40XX』と^{フォーゼロエックス}呼ばれる常軌を逸した世界で、倫理を思考する無力な僕ら。様々な思惑が交錯するSFファンタジー。

万華鏡世界

小さな頃両親が旅先で買ってくれたカレイドスコープは、わたしの宝物だった。

そこから覗く世界は様々に彩りと形を変え、溶けて解けて離れてはまた融ける。

見たことのないその不思議な世界はわたしを魅了してやまず、それは今尚、変わらずわたしを捕え続けていた。

「サノ博士」

実験室に籠もっていれば、ふいに背後から声を掛けられた。

振り向いた先には、手本と言わんばかりに軍服を着こなした初老の軍人が、険しい面持ちで目を細めて立っている。

「実験中ですが」

「まだ仕上がらないのかね」

「焦っても仕方ないでしょう」

「何回失敗したと思っている」

売り言葉に買い言葉はいつものことだ。

器具を静かに実験台に置き、溜め息混じりに向き直った。

「エジソンだって失敗は成功の元だと」

「今はエジソンを崇めてる場合かね」

「例えばですが、大事なことですわ」

マスクを外して、今度は大袈裟に溜め息を見せつけてやった。

またもや険しげに眉根を寄せて、悪臭と言わんばかりに鼻を摘んで彼が口を開く。

「この臭いもどうにかならんかね」

「対象が対象ですから」

「反対派がうるさいのだよ」

反対派が何だと言うのか、わたしは世界を造り上げようとしている。美しいだけでなく、金になり兵器になり、多くを救うであろう世界を。

それがどれだけの偉業であるか、彼は果たして理解しているのだろうか。

いや。理解などしていないのだ、ならば。

「実験段階ですが、次の戦争でお使いになってみますか」

「確かなものなのかね」

「97%の確率で成果を上げるかと」

そうか、と鼻を摘んで頷いた彼を一瞥してから、アナウンスマイクのスイッチをオンにする。

「カレイド実験体N o . 2 0 0 8 5 3 ”を準備段階に。三日後の出撃に備えよ」

遂に世界は目にする。

わたしの造り上げた美しい創造物を。

「倫理に反しているとするさい反対派を黙らせることが出来るといいがな」

「もちろん」

ガチャンと機械音がして、ガラス越しに現れたそれを満足げに眺めた。

死者の四肢を繋ぎ合わせ、人工臓器を埋め込み造り上げたわたしの美しい世界。

見たことのないその不可思議な世界はわたしを魅了してやまず、それは今尚、変わらずわたしを捕え続けている。

それはカレイドスコープに留まらず、わたしの可能性と世界を広げていくのだ。

「倫理は世界を救いはしませんもの」

わたしはそう信じている。

西暦40XX年

西暦40XX年を迎えた地球。

環境汚染の悪化により海上面積は拡大し、水没していく大地に、人類は居住地を追われていた。

そんな中南極海底都市が発見され、探索隊が持ち帰った蒼い石『ムーンダスト』から未知の細菌感染が世界中に広がる。

感染者が身体変異を繰り返し辿り着いた進化系新人類『シャグライナ』との戦いが激化する中、重要優先科学者居住地である海上都市『シーズエデン』では、それに対抗すべく開発された倫理を超えた戦闘型新人類『カレイド』の実用化と実験体となった十代半ばの少女達が存在が、物議を醸し出していた――。

混沌なる存在の者

「サノ博士」

がちゃん、と重厚な鉄扉を開け、広がる無数の巨大な試験官の向こうに立つ女性に声を掛けた。

——ここは気分が悪くなる。

試験官の羊水を泳ぐまだ人型を保たない者達が、自分の同胞であると理解をしているのに。

「あら、何か用かしら」

振り向いた彼女は、いつまでも二十代半ばの美しい容姿を保っていた。

清潔感のある白衣を身に纏い、常に微笑みを絶やさない彼女は、どこか常軌を逸している。

現に、手にしたメスは血だらけで、その先の実験体であろう進化系新人類は肢体を綺麗に捌かれていた。

「……『シャグライナ』も元は……」

「同じ『人間』だとも？」

「……違つと？」

眉根を寄せた俺に、侮蔑の視線を向けた彼女は、明らかに物語って

いた。

――俺達でさえ、同じ『人間』ではないのだと。

「あなたが造ったんだ」

「そうよ、わたしが創ったの。新世界を『創造』したのよ。それが――君達」

わかつている、理解はしているししたいとも思っている。

海上面積の拡大と『シャグライナ』の増加で確かに人類は居住地を追われている。

海上都市増築にも限界があり、今尚、助けを求める人達がいることも知っている。

俺達が『シーズエデン』と呼ばれる重要優先科学者居住地にいられるのは、彼女が俺達を『造った』からだということも。わかつてはいるけれど。

「俺達だって『人間』だ」

どんなに彼女を睨みつけてみても、どんなに彼女を恨んでみても、彼女にはきつと届かない。

グ――グ――グ――。

研究所中に緊急サイレンが鳴り響いた。

この研究室にも取り付けられた赤いランプが、くるくると嫌な光を白い壁に撒き散らす。

同僚達を、彼女を、俺を照らし出し、そうして現実を突き付けてくる。

「『シャグライナ』ね」

「どこに……」

「……東C8区——オリエンタニア付近の海上。監察艇に感染者がいたようね」

そうして増加していく『シャグライナ』。

そうして——

「さて、誰が行く？『カレイドNo.08』」

マイクのスイッチに手を掛けた彼女が、俺を見て薄らと笑った。彼女は常軌を逸している。けれど、

「わかっていてでしょう。『倫理』は世界を救わない」

——そう、『倫理』をかざしてしまったなら、俺達の存在は否定されてしまふに違いないのだ。

ばたん、とドアを閉めた先には、見慣れた同僚——いや、彼女の場合、幼なじみと言える。

気心知れたその少しだけ困惑した笑顔に、張り詰めた糸が切れ溜め息が漏れた。

「ドロワ、ごめん」

「まあいいけど……ガウリーはあんまり、ここへは来ない方がいいよ」

困惑は諦めへと色を変え、仕方ないな、と呟いたドロワが軽く溜め息を吐いた。

「ヴーヴー」と至るところに取り付けられたサイレンランプが、否応なしに、俺達に出撃を急かしていた。

「で、サノ博士は誰を行かせるって？」

ドロワもまた『カレイド』初期実験体だ。

この現状には慣れているし、俺の博士に対する複雑な感情も理解してくれている。

「誰って――」

『出撃要請』

口を開き掛けたところで、無機質な廊下に博士のアナウンスが入った。

金色のストレートボブをさらりと揺らせて、ドロワの青い瞳が、悪戯に細められる。

「どうせ、」

『カレイドNo.04、08、オリエンタニア付近の海上東C8区巡回の監察艇へと出撃せよ』

「——でしょ？」

肩をすくませたドロワに、悪いな、と自分も肩をすくませて見せた。

ドロワとは昔から仲がよかった。

一般家庭に生まれた俺と、世界的な財閥ミケ家の次女として生まれたドロワ。

全くと言っていいほど境遇の違う俺と家族を、家が近いというだけで、受け入れてくれたドロワとミケ家には、感謝してもしきれない部分が多い。

ドロワが実験体に志願した理由も、原因は俺にあるのだから。

沈んでいく気持ちと落ちていく視線。

この、どこまでも混沌として救われない世界にドロワを貶めたのは、他でもない——

「ガウリー」

呼ばれて我に返った。

まただ。

このドアを開けたときと同じ、困惑の笑顔を湛えたドロワがそこにいた。

「あたしがここに来たのは、ガウリーと離れちゃうとつまんないから。それだけだよ」

「……お見通しだな」

「何年一緒にいると思ってんの」

今度はけらけらと笑ったドロワに、これから何度、俺は救われることだろう。

「ありがとな」

思わず笑って見せた俺が、どんな笑顔でドロワの青に映っているかはわからない。

わからないけれど、せめてそれが、卑屈なものではなけばいいと思った。

「それはまあ、生きて帰れたらまた言って」
「……だな」

俺達が出撃要請を受けた。

これから監察艇へと向かい、まさに命を張らねばならない。
駆け出したドロワの後を追って、感傷を捨て去る。
胸ポケットに入れていたスカウターを左目に装着したなら、監察艇
についての情報が映し出された。

「——まずいわね」

同じくスカウターを装着したドロワが、吐き捨てるようにそう口にした。

「ああ——『ユグリー』じゃなさそうだ」

監察艇からの連絡は、既に、一時間はないらしい。
最後に発信されたSOSレベルは7。

間違いなく、『シャグライナ』のレベルだった。

「監察艇に『シャグライナ』？仕組まれてたとは思えない」

舌打ちしたドロワの横に並び、空中バイク搭乗口へと走る。

「だな」

監察艇は年に二回だけ、各海上都市へと戻り人員交代をする。人員の感染検査は厳しく、海上の戦闘で感染した場合はともかく、元々の感染者が選抜されることはまずないと言っても過言ではなかった。

搭乗口には、すでにバイクが二つ用意してあった。

整備士かと思いきや、近づくにつれ鮮明になってきた端正な顔立ちに、ドロワと二人で思わず笑いだす。

「ゲルニカ」

滑るようにバイクに跨がって彼女を呼んだなら、顔を上げたゲルニカが、肩をすくめて答えた。

「またあなた達ね。サノ博士にどれだけ気に入られているのかしら」
「反対でしょ」

「そうね、彼女にも困ったものだわ」

ドロワの言葉に少しだけ表情を固くしたゲルニカもまた、本来ならば、『カレイド』などとはほど遠い存在の筈なのに。

容姿端麗で冷静沈着な才女。

他に道があつただろう彼女をこの世界に引き入れた父親は、娘をきつと、道具としか思っていない。

俺がどうこう言うことではないけれど。

ウンとエンジンを掛けたなら、ゲルニカが険しい口調でこう言った。

「今回の件、気を付けた方がいい」

「『シャグライナ』なんですよ？」

「ええ、たぶん。しかも」

言葉を切ってから継ぎ句に迷っているように、ゲルニカの睫毛が一回落ちた。

それからすぐ上げられた先の瞳は、少しだけ、躊躇いが感じられた。

「たぶん……いなくなつたあの子達が」

いなくなつたあの子達？

意図を汲み取ることが出来ず、思わず首を傾げてゲルニカを見やる。

「あなた達二人なら大丈夫。たぶんね……ただ、気を付けて」

「ああ」

言いたくないのか、はたまた言い難いのか。

そこはやっぱりわからなかったけれど、ドロワと二人、死に行くつもりはなかった。

「じゃあ、行ってくるね！」

「行つてらっしゃい」

見送るゲルニカを背に、俺達は監察艇へとバイクを飛ばした。

監察艇の悪魔

「血生臭い」

監察艇が小さくぽかんと浮かぶ大海。

風上にあるそれから漂う臭いに、ドロワがすんと鼻を鳴らした。確かにドロワは鼻が利く。

が、俺でもわかるほど、鉄の臭いは酷いものだった。

「何人……死んだっていうの」

「ああ、何人『奴ら』がいるんだ」

スカウターが反応を示すには、まだまだ距離があり過ぎる。

大量に『奴ら』があそこにいるとは思えない。

つまりは、かなりの者が、あそこにいるということになる。

「監察艇乗組員で、軍部の人間でしょ？」

「ときには第二期以降の『カレイド』が乗ってる場合もあるよな」

「なのにこの臭い……ゲルニカの言ってたことと関係あるのかな？」

ドロワの言葉に、スカウターで監察艇情報をリストアップしてみる。

オリエンタニア東C8区担当監察艇乗組員で調べてみたなら、案の定、第四期『カレイド』が三人いることが判明した。

二期以降の『カレイド』は完全なる人造体だ。

俺達初期は『戦闘実験体』と称されることが多い。

その名の通り、初期の全十八体は、元は普通の人間だった者に『K-ウィルス』を投与し『カレイド』として進化し能力を身につけている。

まさに、実験体だった。

ウィルス投与により、体質が合わずに進化に失敗して命を落とした者は、公表こそされていないがかなりの数に上るという。

二期以降は遺伝子レベルから『シーズエデン』で創造された完全なる人造体であり、ことによっては、平均レベルは初期より上回っていることが多い。

ある一点の問題を除けば。

「『問題』が起きたか？」

「仲間割れならわかるけど、対『シャグライナ』にそれはないよ」

あっさり断言したドロワに、それもそうかと納得した。

近づく監察艇にバイクのスピードを落として、ゆっくりと甲板に着地した。

「つまんなーいのー」

ピンクのツインテールをぴよこぴよこと揺らして、生首を持ち上げ高らかに笑う同じ顔をした彼女がそう言った。

そう、つまらない。

「四期って聞いてたけど、こんなもんなんだー」

ねーっと同意を求めた彼女に、薄らと笑って応えた。

充満する鉄の臭いと、おびただしくそこら中を彩る真っ赤な鮮血。そして、もはや人の形さえ留めていない人であった者達の山。

素敵だと思った。

ただ、素晴らしいと思った。

あたし達の能力は、こういったことに使うべきだ。それが本能だし、わざわざ誰かや何かのために、押し殺して抗って、フラストレーションを溜める必要なんてない。

もっと、もっと――

「もっと強い『カレイド』と殺り合いたいわね」
「ねーっ」

あははとまた高らかに笑った同じ顔の彼女に、酷く、満足感が胸に
込み上げた。

甲板は不気味なほど静かだった。
穏やかな波が艇底に寄せては返す音が聞こえるほどに。

研ぎ澄ませた感覚が察知した気配は二人。

「……ガウリー」
「ああ、お前も思った？」
「うん」

ドロワの大きな目がす、と細められる。
見据える先は、艇の入り口。

ピピッとスカウターが反応を示す。

『S・ダスト反応あり』

その下に表示されたもう一つの情報。

『K-ウィルス反応あり』

知らず眉を寄せた。

『K-ウィルス反応あり』？

こんな表示は、初めてのことだった。

「何これ、どういうこと？『カレイド反応あり』じゃなくて？」

ドロワの疑問は最もだった。

スカウターは精密だ。

あの『シーズエデン』が開発に取り組んだ代物は、実用化されるまでに常にかつての試験が行われる。

それを見事突破した本物だけが、実戦に使用されるのだ。

そのスカウターが、一度として表示したことのない情報に、困惑の色は隠せなかった。

「生存者は二人。これは間違いないみたいね」

またも表示された情報に、ドロワが一人呟く。

二人が二人、乗組員ならまだいい。
が、まずそんなことはないと思った。

二人が二人、『正規』乗組員とは限らない。

仕組まれた。

ドロワはそう懸念していた。
誰が、何のために？

バイクを降りて入り口のドアに手を掛けようと歩みだしたなら――

「――っ！跳んでガウリー！」
「！？」

ドロワの叫びと反射的に跳び退いたのと、ドアが飛んできたのと爆風が襲ってきたのは、ほぼ、同時だった。

――ピピッ。

スカウターがまた反応を示す。

『S・ダスト、K・ウィルス同時反応あり』

「同時反応！？」

ドロワの驚愕の音が甲板の端から聞こえたなら、甲高い狂気じみた笑い声が、澄んだ空に響き渡った。

凧ぐ風に少しずつはつきりとしていく輪郭。

それに驚愕としたのは、きっと、俺だけではない。それだけは確かだった。

「はーじめまーしてー」

場違い甚だしい甲高い声の主は、未だ鮮血滴る生首をぶら下げてそう言った。

スカウターの表示は変わらない。

同時反応を表示したままだ。

——いや、もつと衝撃の情報が、次の瞬間に表示された。

『カレイドNo.25/レッド・バービー
カレイドNo.26/ローズ・バービー』

——二期『カレイド』!?

言葉を失って目を見開いた。

目の前で鮮血に塗れたピンクのポニーテールの女の子と、ツインテ

ールの女の子。

同じ顔をした彼女達は、情報が間違っていないければ、俺達の同胞と
いうことになる。

「あはははっ、びっくりしてるー！」

黄色い声で笑いたてるツインテールの――『ローズ・バービー』と
表示された彼女は、明らかに狂気に支配されていた。

ゲルニカの言葉が甦る。

『いなくなつたあの子達が……』

彼女達のことを指していたのか。

詳しく語られなかったそれを、知る由はないけれど。

俺達は『カレイド』に違いないが、全ての同胞達を把握しているわ
けではない。

共同戦線を張る仲間は大抵決まっているし、俺の場合、それはドロ
ワや初期のごく一部の者達だった。

ただ、『カレイド』を実質上まとめあげているゲルニカなら、ある
いは、彼女達の存在を知っていたのかもしれない。

様々な憶測が思考を飛びかう中、ドロワが最もな疑問を口にした。

「どうして——どうして『カレイド』が『S・ダスト』に感染を！？」

それに薄ら笑みを浮かべた『レッド・バービー』と表示された彼女が、あら、とようやく口を開いた。

「知らないの？『カレイド』は確かに抗体を持っているけれど、それに対して五十倍の『S・ダスト』を体内に直接投与すれば、感染は可能なのよ」

「五十倍！？そんな強力な『S・ダスト』をどこで——」
「わかつてる筈よ」

レッドの声はあまりに冷たく、ドロワはぐっと黙った。

普段ならば、この程度でドロワが言い負かされることなどない。が、ドロワが押し黙った理由は、痛いほどに知っていた。

信じたくはない、が、きつと間違いなく、『シーズエデン』にはレッドが暗に伝えてくるそれが存在している。

多分、五十倍と言わず、百倍二百倍のそれが。

俺達が身を置く組織は、そもそもが、世界を守るために存在しているような穏やかなものではないのだ。

「あそこにはね、世界を掌握出来るだけのものが何だってあるのよ」
「そうだよーねっ、レッド」

きゃははっと笑ったローズに、鳥肌が立った。

知っていた。

わかっていた。

正義である組織ならば、俺達のような存在を造ることはしない。

『シャグライナ』発生と増加は不慮の事故であつたとしても、倫理に反する存在で対抗しようなどとは、思ったとしても着手などないだろう。

俺達は、きっと、きっと彼女の――

「自己満足で捨て駒なのよ」

レッドの冷めた言葉が、思考とシンクロして刺さった。

「あの女のね」

違いないと眉を寄せて、サノ博士のそれに加担している自分に吐き気がした。

「……あいつ、うちの敵ー？」

「まだわからないけれど、」

首を傾げて俺を指したローズに、口角を上げてレッドが応える。

俺の敵は誰だ。

世界の敵は誰だ。

「っ！ガウリー！」

ドロワの声で我に返った。

誰だ？

誰でもない、俺の今の敵は、

「取り敢えずはお前達、だよな」

そう吐き捨てたなら、レッドが不気味なほど、にやりと笑った。

曖昧な正義

レッドとローズが自ら『S・ダスト』に感染したとして、その真偽は正直わからない。

ただ、現実には彼女達は『カレイド』であり、また、『シャグライナ』でもある。

『カレイド』に組み込まれる『K・ウィルス』も、元を辿ったなら『S・ダスト』であり、彼女達が『シャグライナ』としての進化素質があつたとしても、決しておかしい話ではなかった。

「本当にあたし達と殺り合う？」

レッドが俺を見据える目は、弧を描いている。

試されている。

そう思った。

彼女は直感で理解したのかもしれない。

俺が、サノ博士に対して奥底で抱いている不信任を。

「あなた達がおとなしく投降するなら、そんなことはしたくないわ」

代わりに答えたのはドロワだった。

「あら——あなたは？」

「あなたのしてるスカウターに表示されてるでしょ」

ふうん、と軽く漏らしたレッドは、ようやく自らのスカウターを確認したようだった。

「『カレイドNo.04/ドロワ・ミケ』……あなたがあの、組織で有名な怪力娘ね」

「どうも」

レッドはおそらく、挑発するつもりでそう言ったに違いなかったが、ドロワは鼻で笑っただけだった。

「お前のことをよくわかってないみたいだな」

普段のペースに戻ってきたドロワに、俺自身も落ち着いてくる。

一人ではない。

ドロワがいる。

信頼出来る同胞も仲間もいる。

「みたいね」

軽口に軽口で返したドロワが、次の瞬間には、ローズを勢いよく蹴倒していた。

「——な!？」

驚愕の声を上げたレッドに、肩慣らし程度とばかりにドロワが口角をつりあげる。

「情報はきちんと収集しておくべきだよ」

「ふ、ざけんなよてめえ!」

「こっちはどうも切れやすいみたいね」

蹴倒された勢いで、ローズの手にしていた生首が、こちらにごろつと転がった。

——ピピッ。

『カレイドNo.49/マジ・ロン死亡』

今更な情報が、スカウターに表示された。感傷に浸る時間はない——つもりもない。彼らはある意味そのために造られ、俺達もそのために実験体となった。

慣れたと思ったつもりはないが、慣れなければ、何かが崩壊してしまう。

そついう世界で生きている。
生き抜くために。

起き上がるうとしたローズにもう一発食らわせたドロワを視界に捉えながら、俺も甲板を蹴って駆け出した。

「甘く見ないで」
「そつちこそ」

レーザーソードを構え向かってくるレッドに、同じくレーザーソードを構え答えた。
ガキンと交えたそこから、ヴヴツと電子音が鈍く重なる。

赤と赤のレーザーに、同じ色とはまた皮肉なものだと思った。

力はこちらが上だったが、素早さはレッドが勝っている。
が、

「ドロワのもう一つの愛称を教えてやろうか」

俺とドロワは同期であり、そして何より幼なじみだ。
いつだって一緒にいたし、演習だって自主トレーニングだって、何だって一緒だった。

「聞きたいわね」

押されたレッドが素早くソードを離し、回り込んで斬り掛かってくる。
間一髪でそれを躲してから、振り向きざまにまたそれを交えて言った。

「『スピードマスター』だよ。見ただろ？」

レッドは素早い、俺よりも。

だが、スピードマスターと異名を取るドロワは、力と素早さなら『カレイド』一だ。

サノ博士と開発チームお墨付きのその彼女と、誰よりトレーニングを積んだのは、他の誰でもなく、この俺に違いなかった。

「はんっ！」

吐き捨てたレッドには、焦りの色が見えた。

視界の端に捉えるドロワとローズに、思わず勝機を確信する。
ローズのレーザーガンをいともたやすく避けながら、体一つで追いつめていく幼なじみの姿に。

飛ばした観察機からの映像に、一人、ほくそ笑んでいた。
交わるレーザーソード、飛び交うレーザーを肉眼では捉えること不可能な速度で躲すわたしの創造物。
美しく美しい、世界を救う最高傑作。

コンコン、と控えめなノックと共に、冷静沈着で有名な彼女の声が、インターホンから実験室に響いた。

『ゲルニカです』
「どうぞ」

短くマイクに答えてから、開閉ボタンを押す。
ちらと振り返ったなら、開いたドアの向こう、見応えのある蒼い長髪が、束ねられた高い位置で、一瞬美しく揺れた。

「どんな用かしら」
「やっぱり、観察機を飛ばしてましたね」
「あら、構わないでしょう」

あれはわたしの創造物。
混沌を救う、唯一無二の正義。

視線を交わしたゲルニカは、美しい造形を軽蔑に歪めていた。

「あなたはわたしが嫌いなものね」

現在のあなたを造り上げたのは、紛れもなく、このわたしだということに。

正義は常に理解されない。

世界は常に無知だ。

本当に必要なものが何たるか、真理を知る者は常に少数であり、闘うべきは無知である。

「まあ、構わないけれど」

「レッドとローズの件、あなたは知っていた筈です」

椅子の背もたれを揺らしたなら、背中からゲルニカの非難の視線を感じた。

ああ——とばかりに、壁一面に映し出された映像を眺める。

ガウリーがレッドに一撃をくれ、ドロワがローズの鳩尾を抉ったところだった。

「最高だわ。あの二人は、初期の中でも特出している」

「わかっています、だから行かせました。——聞いているのは、」
「知っていたわ」

くるりと反転して見据えた彼女は、酷く、苦々しい表情を浮かべていた。

わかっているだろうことを敢えて確認するのは、彼女の慎重さ故かはたまた、わたしに対する不信任感故か。

「対策研究室から五十倍濃度の『S・ダスト』が紛失した。監視力メラは犯人を確認出来ていなかった」

「操作ですか」

「いいえ。どんなに完璧と思われる防犯システムにも、残念なことに穴はある」

そう、何にしても、残念なことに欠陥は生じる。

初期実験体が非情になりきれないこともそうであるし、また、二期以降の『カレイド』達についてもだ。

レッドとローズに関して言うなれば、二期以降の欠陥が顕著だったというだけのことである。

けれど、自分の創造物がどこまで能力を開花出来るのか。

どこまで貪欲に上り詰めることが出来るのか。

「穴を知っていた——または、それを知るだけの環境にいて現状に不満を抱いていた者。ピックアップするのはたやすかったわ」

薄く笑った先でのゲルニカの反論には耳を貸さなかった。

貸す必要はあるまい。

彼女もまた、わたしの敵とする無知の一つなのだから。

「サノ博士、」

「見て、ゲルニカ」

映像の先、彼女の視線がそこに移動したことを確認してから、わたしは笑みを濃くした。

「『カレイド』が『シャグライナ』に進化した場合、とてつもなく大きな能力が開花する」

わたしの創造した二期以降の『カレイド』の欠陥——『戦闘的であり自尊心過剰』を補ってありあまるであろう能力。

それを今、ドロワにねじ伏せられたローズが、発揮しようとしていた。

映像の下部に表示されたものは——

『危険予想レベル8』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804r/>

08-40XX

2011年3月22日11時07分発行